

「文字通り」の手続き的意味について¹

近大志

京都大学大学院

alberto_balsalm@aol.com

概要：本稿の目的は発話解釈の観点から「文字通り」の機能を考察し、これを単一の手続き的意味として規定することにある。「文字通り」は「後続表現の構成要素の意味を強調する」「後続表現を字義的に解釈させる」をはじめ、靱山 (2014) や用例観察に基づく記述からは多数の機能が想定される。このとき、「文字通り」の機能を多義として規定するか、より一般的な手続き的意味から派生された用法群として解釈するかで2通りの説明が可能であるが、本稿の目的に鑑みて筆者は後者の立場を採用する。そして、その機能を「パラ言語的情報を参照し、後部要素の非帰属的メタ表示を形成せよ」という手続き的意味として同定し、関連性理論 (Wilson & Sperber 1995; Wilson 2000) の枠組みから後部要素の解釈プロセスを説明する。

キーワード：「文字通り」、手続き的意味、ダブルミーニング、関連性理論

1. はじめに

「文字通り」²に後続する表現は、何らかの点で通常とは異なる解釈をうける。本稿の導入として、例を以下に示す。

- (1) 高知県境にある愛南町正木地区で7日、「第18回県境篠山（ささやま）騒動どろんこサッカー大会」があった。愛媛、高知両県や遠くは関西方面などから過去最多の男女計70チームが出場し、田んぼに水を張ったコー

¹ 本稿は筆者が2019年度に京都大学大学院 人間・環境研究科へ提出した修士論文 (近 2020a) および日本語用論学会第22回大会 (於 京都外国語大学) の発表論文 (近 2020b) を基にしている。

² 本稿は「文字通り」「文字通りの」が同一の機能を持つという前提に立ち、両者をまとめて「文字通り」と表記する。後述する靱山 (2014) においても、これと同様の前提に立っている。

トで全身泥だらけになって、**文字通りの「泥試合」**を繰り広げた[。]

(2008年9月8日 朝日新聞朝刊 強調筆者)

- (2) ...物価上昇分の増額（インフレ調整）を国防費について認めるか、それとも社会保障費について認めるか、**文字通りの「大砲か、バターか」**の調整が最大の課題になりそうだ。

(1985年6月5日 朝日新聞朝刊 強調筆者)

- (3) 腰が痛くて情けない気持ちになったことはありませんか？ **腰は文字通り体をささえる「要」**です。

(『全民医連 コラム』³ 強調筆者)

- (4) 難しい重要文化財の展示会が、かつては比較的簡単に開かれたことには驚いた。ヘビ展で2時間待ちの行列ができ、新聞に「**文字通りの“長蛇”の列**」と書かれたことも、今では笑い話に。

(1989年11月11日 朝日新聞朝刊 強調筆者)

(1) では、「文字通りの」の後続表現である「泥試合」が「互いに相手を非難しあう醜い争い」という比喩的意味ではなく、「泥にまみれた戦い」という字義の意味として解釈される。しかし、「文字通り」の後続表現は常に字義の意味として解釈されるわけではない。(2) ではむしろ比喩的意味「政治と民生」が強調されている。(3) では後続表現「要」の書字形が先行要素「腰」の書字形に含まれると認識することで、「腰」の意味が強調されている。(4) では、「長い行列」という比喩的意味に加えて、「ヘビ(展)に並ぶ行列」といった臨時的な解釈を受けるため、ダブルミーニング(佐藤等 2006)の一種だとみなせる。

(1-4)の観察から、次のような疑問が生じる。

- (5) 「文字通り」は、後続表現の解釈に対して何らかの役割を演ずると考えられる。その機能は何であり、後続表現はどのように解釈されるか？

本稿は上記の問いをリサーチ・クエスチョンとして設定し、機能のあり方と後続表現の解釈に関する議論を行う。

議論の流れは次の通りである。2節では先行研究として朧山(2014)の論を取り上げ、その疑問点を示す。3節では用例観察から得られた、先行研究で言及されていない機能を列挙する。4節では「文字通り」を手続き的意味として規定し、5

³ <https://www.min-iren.gr.jp/?p=6325>

節では関連性理論から後続表現の解釈プロセスを説明する。6節は結論である。

2. 先行研究

2節では「文字通り」に関する先行研究として靫山(2014)の主張を要約し、2つの疑問点を指摘する。議論の流れは次の通りである。2.1節では靫山(2014)を要約し、「文字通り」には少なくとも3つの機能があることを確認する。2.2節では靫山説に対する疑問点-他の機能の可能性および機能の独立性-を挙げる。

2.1. 靫山(2014)

靫山(2014)は「文字通りのNP」というパターンを例に挙げ、「文字通り」の機能は少なくとも3つあると主張した。

- (6) a. 後続表現の構成要素の意味を活性化させる機能
- b. 後続表現が本来の意味であることを明示する機能
- c. 後続表現の程度性を有する特徴が顕著であることを明示する機能

(6a)は後続表現を「『文字』の通り」に読ませることで、構成要素による全体の意味への貢献度(分析可能性)を高める機能、すなわち構成要素の活性化を促す機能である。

- (7) 字が書けると気づいた人もすごいが、驚くのは自然の恵の深さ。文字通りの「葉書」は配達されるのか、郵便事業株式会社に聞くと「破れそうだと扱えない場合があります」

(2012年8月8日 中日新聞 朝刊 強調筆者)

葉書は分析可能性が低い表現であるため、通常「葉」の意味が「葉書」に貢献しない。しかし、(7)の文脈では「葉」の意味が喚起されることで、「葉を素材とした郵便物」という臨時的な解釈が「葉書」に与えられている。機能(6a)に関して、靫山は以下の説明を与えている。

- (8) 「文字通りの葉書」のような、「文字通り」が「後続表現の構成要素の意味を活性化」という機能を果たす場合、「文字通り」の「文字」に当たるのは、「葉書」の「葉」のような、ある表現の1つ構成要素であると考えられる。さらに、この構成要素の基本的な意味の「通り」に、「葉

書」などの表現を解釈することを読み手（聞き手）に求めていると言えよう。

(靱山 2014: 154 強調筆者)

(6b) は、後続表現を比喩的意味ではなく字義的意味として解釈させる機能を指す。

- (9) 田辺さんが出場するのは、高さ七メートルの所に張った長さ二十メートルのロープを往復してタイムを競う「ロープブリッジ渡過」と呼ばれる種目。前半はロープにまたがって前進し、後半はぶら下がるようにして戻ってくる**文字通りの綱渡り**。

(1998年8月21日 中日新聞朝刊 強調筆者)

綱渡りの比喩的な意味は「はらはらするような危険な行動」を指すが、ここでは「高所をロープで渡る」という字義的な意味として解釈される。靱山は (6b) の機能について、次のように説明している。

- (10) 「文字通り」が「後続表現が本来の意味であることを明示」という機能を果たす場合は、「文字通り」の「文字」に当たるのは、「綱渡り」などの**表現全体である**と考えられる。そして、このような表現について、比喩としての意味ではなく**本来の意味の「通り」に解釈**することを読み手（聞き手）に求めていると言えよう。

(靱山 2014: 154 強調筆者)

(6c) は、後続表現の慣習的意味が持つ性質が規範よりも夥しいことを強調する機能である。

- (11) 飢えと重労働の毎日。発疹チフスの流行。シベリアのアルタイスカヤ収容所は、**文字通りの地獄**と化していました。千人の抑留兵のうち、一冬に700人が亡くなりました。助かった者もまるで幽鬼のごとくやせ衰え、歩くのもやっとの状態でした。

(2008年2月14日 朝日新聞朝刊 強調筆者)

(11) は地獄の仄めかす「過酷な状況」が甚だしいことを表している。(6c) に関して靱山は次のように説明する。

- (12) 「地獄」は、(比喩として用いられる場合も) <悲惨である> 程度が顕著である際に使われるのが本来の使い方であると考えた場合、「文字通りの地獄」とは、「地獄」の意味を、<悲惨である> **程度が顕著であるという本来の意味の「通り」に解釈**することを読み手(聞き手)に求めていると言えよう。

(昀山 2014: 155 強調筆者)

上記の論をまとめると、「文字通り」は後続表現について3つの解釈の仕方を提供する。1つ目は「文字」の通り読ませることで構成要素の意味に注目させる方略であり、2つ目は「文字通り」に読ませることで字義の意味として解釈させる方法で、3つ目は後続表現の表す任意の性質に注目させる仕方である。

2.2. 先行研究の疑問点

昀山説は「文字」の通り読ませることに「文字通り」に読ませることを区別し、「文字通り」の多様な振る舞いを説明している点が魅力的であるが、2つの疑問が浮かぶ。(6)の3つ以外に他の機能は存在しないのだろうか。そして、後続表現の解釈過程に注目したとき、独立した機能の正当性は何に求められるのか。

まず、1つ目の疑問についてである。例えば、本稿の冒頭で(2)の「大砲か、バターか」では比喩的な意味が強調されていること、(3)では「要」の書字形が解釈に用いられることを確認したが、これらは(6a-c)では説明できない。「大砲か、バターか」については、慣習の意味「軍事か民生か」が「地獄」のように程度性を持つものではないため、(6c)からは説明できない。「要」については、構成要素の字義の意味(基本的な意味)ではなく書字形が解釈にとって必要となるため、(6a)から説明できない。よって、前者に対しては「後続表現の比喩の意味を強調する機能」、後者では「後続表現の書字形に注目させる機能」が想定できる。しかし、この指摘自体は大した問題を生まない。少なくともと断っているように、昀山自身(6a-c)が「文字通り」の全ての機能だとは考えていないからである。

次に、2つ目の疑問についてである。例えば、(6a)と(6b)は相互に独立した機能だといえるのだろうか。(6a)は「構成要素」の「基本的な意味」に注目させる機能であり、(6b)が「表現全体」の「本来の意味」として解釈させる機能だったが、言語表現の解釈の仕方からは両者の区別が難しいように思われる。字義的解釈とは要素の字義の意味を組み合わせた結果に他ならないため、例えば「綱渡り」の字義的解釈は(6b)ではなく(6a)からも説明が可能である。このように、後続表現の解釈の仕方を考慮に入れつつ機能を精査したとき、それぞれの機能の

独立性は決して自明ではない。

本節では先行研究として靫山 (2014) による「文字通り」の機能 (6a-c) を概略し、他の機能が存在する可能性と機能の独立性に関する疑問を提示した。次節では、用例観察を通して他の機能の可能性を探ると共に、本稿が採用する機能の説明法を明らかにする。

3. 「文字通り」の機能と多義性について

機能を同定する基準が論じられていない以上、靫山 (2014) で採用された手法は「後続表現の解釈のバリエーションを『文字通り』の機能に対応づけるアプローチ」だといえる。3節ではこの手法に則り、靫山 (2014) で指摘されていない機能を用例観察から探る。そして、複数の機能を説明する手法について検討する。議論の流れは次の通りである。3.1 節では用例観察から「文字通り」の機能を新たに 4 つ提案する。3.2 節では機能の説明法として多義、もしくは多義ネットワークとして規定する方法と単一の手続き的意味から他の機能を説明する方法があることを確認し、本稿の目的から後者を採用する。

3.1. 機能の観察

機能の独立性に関する問題を一旦保留すると、このアプローチに則った用例観察からは (6a-c) に加えて 4 つの機能が新たに設定される。⁴以降の議論でも度々用いるため、まずは以下のようにまとめる。

(13) 「文字通り」の機能

- a. 後続表現の構成要素の意味を活性化させる機能
- b. 後続表現が本来の意味であることを明示する機能
- c. 後続表現の程度性を有する特徴が顕著であることを明示する機能
- d. 比喩的意味の強調
- e. 字義的意味の強調
- f. パラ言語的情報への注目
- g. ダブルミーニング

次節以降、(13d-g) について順に確認していく。

⁴ 用例は基本的に朝日新聞データベース (聞蔵 II) から採取したものであり、[文字通りの] を検索キーとして 1552 件のデータを得た (2019 年 7 月 9 日当時)。ただし、場合に応じて web ページや SNS のデータも使用する。

3.1.1. 比喩的意味の強調

(2) の「大砲か、バターか」で確認したように、「文字通り」に後続しつつも比喩的意味として強調される例がある。これに対応する機能を「比喩的意味の強調」と呼ぶことにする。

- (14) 座席の下で雨がっぱをかぶって寝た。翌朝7時ごろに大阪に着き、教わった通りにやって品物を仕入れ、4時間後には大阪を出発した。**文字通りのとんぼ返り**である。

(1988年4月30日 朝日新聞朝刊 強調筆者)

- (15) 現在の海上道路は1923年に完成した。両国を隔てるジョホール水道に堤を築き、道路とした。全長1056メートルの土手道にはマレーシアからの水道管や鉄道も敷かれ、シンガポールにとっては**文字通りの大動脈**。

(1989年10月17日 朝日新聞朝刊 強調筆者)

ここで注意したいのは、「強調」の対象が比喩的意味に対する話者のコミットメントであり、特定の性質ではない、という点である。「地獄」とは異なり「とんぼ返り」「大動脈」に程度性をもった性質が内在するとは考えづらいため、(14-15)の事例は機能(13c)から説明することができない。

3.1.2. 字義的意味の強調

初山(2014)の説明によると、(6b)は「比喩的意味としてではなく字義通りの意味として後続表現を解釈させる」機能であった。しかし、比喩的意味との対比を通さずに字義的意味が強調される事例も一定数存在する。

- (16) 赤米は奈良・平城宮跡の出土木簡などによく出てくる**文字通りの赤い米**で、鎌倉時代には祭礼に用いられたとされる古代米。

(1990年4月18日 朝日新聞朝刊 強調筆者)

- (17) 適応障害というのは、**文字通り『適応できない人』**ということです。やはり若い人、社会人1年生、2年生が多いと思います。適応力の低い『未熟な人』がかかりやすい。

(JaTenTen コーパス 強調筆者)

上記の例で、後続表現は先行要素で提示された用語を換言している。(16)は「赤

米」が「赤い米」であることを明示する例であり、(17)は「適応障害」が「適応できない人」を示している。このような事例に対応する機能を「字義的意味の強調」と呼ぶ。

3.1.3. パラ言語的情報への注目

書字形といったパラ言語的要素に注目することで初めて解釈の手がかりが得られるような事例が存在し、これに対応する機能を「パラ言語的情報への着目」と呼ぶ。(3)の「要」に加え、次のような例が確認された。

- (18) 中津川市加子母(かしも)の加子母大杉地蔵尊で30日夜、ナメクジにこと寄せた風変わりな祭りがある。...由緒とは裏腹に、祭りは1986年からと新しい。地元が村おこしに始め、豪華景品が当たる1枚250円の三角くじもあって人が集まる。以前は、紙をなめると果汁で書き込んだ文字が浮かび上がる、**文字通りの「なめくじ」**だった。

(2017年8月30日 朝日新聞朝刊 強調筆者)

- (19) 同封されたプリントを頼りに、4月下旬、種モミを塩水に入れ、軽いモミを浮かせて除く塩水選、5月の苗代、6月の田植え、そして8月、穂が出る前に田の水を落とす中干し、さらに水を流し込む走り水をするといった具合に、「米」という**文字通りの「八十八の手間」**をかけ、ようやく一握りの収穫を得た。

(1991年12月13日 朝日新聞朝刊 強調筆者)

(18)については、言語形式を手がかりに「なめくじ」から形態素を発見することで「くじ引きをなめる」というユーモアに富んだ解釈が得られる。また、(19)では「米」の書字形を手がかりとして、「米を栽培するための(『八十八』に相当する)大変な作業」という解釈が得られる。2.2節でも述べたように、(6a)は「構成要素の意味に着目させる」機能であるため、上記の事例を説明することができない。

3.1.4. ダブルミーニング

ここまで、「文字通り」の後続表現が多様な解釈を生むことを確認した。だが、後続表現のもう一つの重要な側面として、新奇な解釈だけでなく慣習の意味も当該コンテキスト上で保持されるという傾向が指摘できる。同一形式が2つの意味を担う現象はダブルミーニング(異義兼用)と呼ばれ(佐藤等 2006)、この解釈に

対応する「文字通り」の機能を「ダブルミーニングの機能」と呼んでおく。⁵

- (20) ナイトクラブなどに通っている男性は、男性ホルモンが満点で**文字通りの肉食系**が多いことでも知られています。こういった場合、同伴やアフターなどで利用する飲食店といえば、焼肉店と言えるでしょう。

(『やっぱ好きやねん。北新地』⁶強調筆者)

- (21) 繁殖のためにやって来たが、病気の有無を調べる検疫も無事に終了。展示室では約2メートルの近距離で、生後4カ月のかわいい盛りを観察できる。天王寺動物園は「**文字通りの『虎の子』**。人気者にと期待してま

(2003年10月16日 朝日新聞朝刊 強調筆者)

- (22) 木羽の制作は**文字通りの真剣勝負**。鉈は刃渡り27センチ。極薄の板の中心線に当てる鉈が少しでもそれれば、板を支える左足の親指はなくなるだろう。

(2013年3月1日 朝日新聞朝刊 強調筆者)

(20-22) では、文脈から得られた解釈「肉を好んで食べる」「虎の赤ちゃん」「刃を用いた危険な作業」に加え、それぞれの慣習的意味「恋愛に積極的な様」「大事な事」「気迫がこもった戦い」が並立している。この機能をより明確にするため、後続表現がダブルミーニングとして解釈されない例についても確認したい。

- (23) 昨年から「肉」の消費が増えています。...アベノミクス効果で景気が上向き、それに伴って、**文字通りの「肉食系」**が増えている状況がうかがえます。

(2014年5月14日 朝日新聞朝刊 強調筆者)

- (24) 試合は見応え十分。集中力を欠くプレーでエラーなどしようものなら、容赦ない怒鳴り声が球場に響く。**文字通りの真剣勝負**に「体力は男子の80%くらいだが、技術的には何ら見劣りはしない」と川越氏も胸を張る。

(2009年7月28日 朝日新聞朝刊 強調筆者)

⁵ ダブルミーニングのうち、コンテクスト上で両者が保持されるものは異義兼用と呼ばれ、一方の解釈のみが選択されるものは *double entendre* と呼ばれる (cf. Giora 2003; 佐藤等 2006)。本稿がダブルミーニングと呼称するのは前者についてである。

⁶ <https://www.yappasukiyanen.net/>

(23) の「肉食系」は (20) と異なり、慣習的意味が保持されていない。また、(24) の「真剣勝負」では (22) とは異なり字義の意味が解釈に現れない。ダブルミーニングを生む事例と生まない事例で解釈のプロセスが異なることについては、5 節で議論する。

3.2. 説明の方針

(13) に示したように、「文字通り」は多数の機能をもつ。機能の説明として、各機能を多義もしくは多義ネットワーク (cf. Lakoff 1987; Traugott and Dasher 2002) として記述するか、抽象的な手続きの意味 (cf. Carston 2016; 吉村 2018) から推論によって生じた用法として捉えるかの 2 通りが候補として考えられる。⁷ 一般に、前者の立場を採る研究者は言語の意味記述に関心があり、後者の立場は発話解釈プロセスとの関わりを重視する。筆者は本稿の目的 – 後続表現の解釈における「文字通り」の役割を説明する – に鑑みて、後者の立場を採る。⁸ 最終的にどちらのアプローチを採用するかは研究者の関心に依るものだが、「文字通り」の特徴づけには推論のあり方を示す必要があるだろう。

本節では用例観察から「文字通り」の機能を新たに 4 つ提案し、靱山 (2014) のものと合わせて (13) に提示した。次節では「文字通り」の機能を手続きの意味として規定し、機能のあり方を示す。

⁷ ちなみに、同様の議論は英語の *literally* でも展開されている。*literally* の機能を論じた研究としては Israel (2002) や Park (2016) 等があり、*literally* と「文字通り」の機能はおおよその対応関係にある (近 2020a)。しかし、以下のコメントから分かるように、Israel (2002) は機能の説明は行っていない。

For the purposes of this paper, I remain neutral as to **whether these functions should be treated as distinct senses in a polysemy network or as pragmatic instantiations of a more general procedural meaning.**

(Israel 2002: 426 強調筆者)

⁸ 筆者は「文字通り」の多様なふるまい自体は否定しないが、用法群を「多義」として規定できるかは慎重に検討すべきである。まず、2.2 節で指摘した機能の独立性をどのように担保するかが問題となる。そして、管見の限りでは各機能を選好する後続表現の特徴が見出せなかった。この理由から「多義」として「文字通り」を規定する際、いかにして各用法を定着した機能として認定するかが大きな課題となるだろう。本稿ではこれらの問題については議論せず、後続表現の解釈過程から手続きの意味と (13) との関連を示すことのみを焦点を当てる。そのため、以降の議論で「機能」と呼ぶものは「文字通り」の手続き的意味を除き、単なる「用法」として読み替えてほしい。

4. 「文字通り」の手続き的意味

本稿は「文字通り」の機能を手続き的意味として規定し、(13) に挙げた機能をコンテキスト上に実現した用法として捉える。4 節では概念的意味・手続き的意味の対立 (Carston 2016; 吉村 2018) とメタ表示 (Wilson 2000) に関する知見を援用し、「文字通り」の手続き的意味を規定する。議論の流れは次の通りである。4.1 節では概念的意味との対立から手続き的意味を特徴づける。4.2 節ではメタ表示に関する一連の考察を概観し、「文字通り」の機能をメタ表示に関連づける。4.3 節では手続き的意味を「パラ言語的情報を参照し、後部要素の非帰属的メタ表示を形成せよ」として規定し、なぜ「文字通り」が後続表現の書字形や構成要素へアクセスを聞き手 (読み手) に促すのかを説明する。

4.1. 手続き的意味

語用論の理論 (特に関連性理論) によると、語にコード化されている意味は直接真理条件に寄与するものと、それ自体は真理条件を規定せず特定の推論プロセスを指示するものものに二分される。前者は概念的意味と呼ばれ、内容語や前置詞が典型例である。後者は手続き的意味と呼ばれ、時制・指示詞・連結子 (e.g. and, but)・談話標識 (e.g. oh, well)・文修飾副詞 (e.g. frankly) といった言語的なものに加え、特定のイントネーションやジェスチャーといった非言語的なものも該当する (cf. Carston 2016; 吉村 2018)。両者の区別について、Iten (2005) は概念的意味を「我々が意識的に考えることのできる意味」、手続き的意味を「それ自体を意識的に考えることが難しく、使用方法によってでしか論じることのできない意味」と特徴づけている。teacher や chair といった概念的意味に属する語の概念はイメージが比較的容易であり、大まかなパラフレーズを与えることが可能である一方、however や so といった語の手続き的意味はそうではない。⁹また、概念的意味はアドホック概念形成を適用した結果、コード化された意味から派生した意味 (e.g. メタファー) が得られる一方、同様の手続きを適用し、手続き的意味からメタファー的解釈を得ることはできないとされる (Carston 2016; 吉村 2018)。すなわち、前者の意味は多義になり得るが、後者を多義として規定することは不可能である。

⁹ 例えば、however には以下の定義が与えられる。

however: **used to** introduce a statement that contrasts with or seems to contradict something that has been said previously

(New Oxford American Dictionary 強調筆者)

では、「文字通り」はどちらの意味に属するだろうか。まず、「文字通り」の概念自体を *teacher* のように考えることは困難であり、コンテキスト上のふるまい、すなわち用法によってでしか捉えられないと思われる。そして、「文字通り」が *teacher* のような外延をもち、アドホック概念形成が適用されるとは考えづらい。よって、「文字通り」は手続き的意味であり、解釈プロセスの観点からは単義であると結論づけられる。

では、「文字通り」は聞き手の推論に対してどのような制約を課す手続き的意味なのだろうか。結論から示すと、後続表現の「文字」という情報を参照させることが「文字通り」の手続き的意味だと考えられる。これを精緻化する目的で、次節ではメタ表示 (*metarepresentation*) の概念を導入する。

4.2. メタ表示

関連性理論において、発話解釈プロセスは表示 (*representation*) を形成する手続きとして捉えられる。カンバスに描かれた風景画が実際の景色に類似させた表示であるように、発話から構築された命題 (表意) は世界の状態に類似した表示である。また、単に世界の状態を聞き手に伝えるだけではなく、話者の態度や感情を伝達することも言語のやりとりにおいて重要な役割を演ずる。話者の心的態度は、発話の表示に対する表示、すなわちメタ表示 (*metarepresentation*) として説明される。

(25) Peter: That was a fantastic film.

Mary: a.[happily] Fantastic.

b.[puzzled] Fantastic.

c.[scornfully] Fantastic.

(Wilson 2000: 432)

Peter の発話に対する返答として、Mary が (25a-c) の様子で *Fantastic*. と答えたとしよう。このとき、Mary の発話 (命題) の表示は [That was a] *fantastic* [film]. となる ([]内はコンテキストから復元した要素)。この表示を P としたとき、Peter の心内に表示される、Mary による P への心的態度、すなわちメタ表示は次のように記述できる。

(26) P に対する Mary の心的態度

a. She believes I was right to say/think P.

- b. She is wondering whether I was right to say/think *P*.
- c. She believes I was wrong to say/think *P*

(ibid.)

(26) の a-c はそれぞれ、Mary の発言 (25a-c) に対応する。(26a) は Mary が *P* に同意していることを表すメタ表示であり、(26b) は *P* の正しさについて断定できないことを表し、(26c) は *P* が正しくないことを示す。¹⁰

表示の 2 つの区分に加えて、メタ表示は話者の思考を反映したものか否かによって帰属的な (attributive) メタ表示と非帰属的な (non-attributive) メタ表示に区別される。(26) は帰属的なメタ表示の例であり、非帰属的なメタ表示には次のような例が該当する。

(27) 非帰属的メタ表示

- a. 'Dragonflies are beautiful' is a sentence of English.
- b. 'Shut up' is rude.
- c. It's true that tulips are flowers.

(Wilson 2000: 413)

(27a) は文 ('Dragonflies are beautiful'), (27b) は発話 ('Shut up'), (27c) は命題 (tulips are flowers) がメタ表示されている。各例に反映されたものは話者の思考ではなく一般的常識や特定の言語圏で共有された知識であるため、これらは非帰属的メタ表示だといえる。

以上の知見を援用することで、「文字通り」の後部要素に対して、パラ言語的情報の「書字形」を反映した非帰属的メタ表示が形成されたと考えられないだろうか。¹¹すなわち、メタ表示によって、書字形という情報が聞き手 (読み手) による推論の素材として利用可能となるのである。

¹⁰ *P* はメタ表示に埋め込まれた命題 (表意) であるため基礎表意 (basic explicature) と呼ばれ、メタ表示に対応する命題は高次表意 (higher-level explicature) と呼ばれる。本節の主眼は命題ではなく後続表現に対するメタ表示について議論するものであるため、表意の区分については詳しく取り上げない。

¹¹ Wilson (2000) はメタ表示の適用対象が文レベルだけでなく語・句単位にも及ぶことを示唆している。この論を受け、塩田 (2018) ではピクトグラム (絵文字) を非帰属的メタ表示の一例として扱っている。

4.3. 「文字通り」の手続き的意味

4.1 節では概念的意味/手続き的意味の区別を紹介した。そして、4.2 節ではパラ言語的な情報 (i.e. 書記形) が非帰属的メタ表示に属すことを確認し、「文字通り」の後部要素にメタ表示が形成される可能性を提示した。これらの議論から、「文字通り」の機能を以下のように規定する。

(28) 「文字通り」の手続き的意味:

パラ言語的情報を参照し、後部要素の非帰属的メタ表示を形成せよ

上記の手続き的意味が果たす役割を明確にするため、後部要素におけるメタ表示のあり方を図 1 に示す。

後部要素の表示	後部要素の非帰属的メタ表示
[...文字通り体を支える要...]	[...文字通り 体を支える要 ...]

図 1. 後部要素の 2 つの表示。

図 1 の右部にある手書きフォント (HanziPen TC) は、「体を支える要」の非帰属的メタ表示を表している。(3) の「要」は「腰が身体で重要な部位である」という解釈を受ける例であり、この解釈を導出するには書字形へのアクセスが不可欠であった。「要」の書字形にアクセスしたことを契機として「文字通り」に先行する「腰」にもメタ表示が形成された結果、「要」が「腰」に含まれることが認識される。

また、書字形に類似させたメタ表示を形成する副次的な効果として、後部要素の構成要素へのアクセスが促されると考えられる。「葉書」の例 (i.e. 葉っぱを素材とした郵便物) において、「文字通り」が後続表現を「文字」の通り読ませ、分析可能性の低い構成要素「葉」にアクセスするという説明 (機能 6a) があったことを思い出してほしい。書字形を意識的に注目するときに構成要素の分析可能性が考慮されないと仮定したとき、靱山がいう「文字」通りに読むという行為は非帰属的メタ表示がトリガーとなって発動される処理だと解釈ができる。

後部要素の表示: 後部要素の非帰属的メタ表示:

[... 文字通りの[葉書]....] [... 文字通りの **葉書**]

図 2. 葉書の 2 つの表示。矢印はアクセスされた構成要素を表す。

ここで一点注意を加えておきたい。それは、手続き的の意味によって後部要素のメタ表示が形成された結果、聞き手（読み手）は発話解釈の材料として書字形や構成要素の意味が利用可能となるが、これらの情報が必ずしも最終的な解釈に反映されるとは限らない、という点である。例えば、比喩の意味が強調されるような例（e.g. バターか大砲か）では構成要素の字義の意味や書字形が当該コンテキストにおいて関連性を生まないため、これらの情報は最終的な解釈には反映されない。すなわち、「文字通り」は後続表現の解釈に関して多くの情報を提供するが、最終的にどの情報が選択されるかはコンテキスト上の関連性から決定されるのである。

本節では「文字通り」の手続き的を提案し、後部要素の非帰属的メタ表示が書字形や構成要素へのアクセスを促すことを確認した。次節では、(13) に示した機能を手続き的意味と後続表現の解釈プロセスから捉え直す。

5. 手続き的意味と後続表現の解釈

5 節では後続表現の解釈が導出されるプロセスを提示し、「文字通り」の手続き的意味から個別の用法へ派生されることを説明する。議論の流れは次の通りである。5.1 節では関連性理論が標準的に採用する発話解釈プロセスを援用し、「文字通り」の後続表現の解釈プロセスを示す。5.2 節では後続表現がダブルミーニングとして解釈される事例について説明し、5.3 節では単一の解釈だけが残る事例について説明する。

5.1. 関連性と発話解釈プロセス

本稿では、後続表現の解釈プロセスの説明に関連性理論（Sperber & Wilson 1995）による発話解釈手順を援用する。メタ表示について詳細な検討が行われていることと、解釈について一貫した説明を与えられることが関連性理論を採用した理由である。まずは、関連性理論において発話一般に仮定される解釈プロセス（cf. Carston 2002; Sperber & Wilson 1995）を示す。

(29) 発話解釈の手順:

- a. 接近可能性の高い情報の順番に処理を行う
- b. 期待された関連性が満たされた場合 (もしくは満たされなかった場合) に処理をストップする

接近可能性とは遭遇頻度・コンテスト上の関連性から成る指標を指し、発話現場において聞き手がアクセスしやすい情報であるほど接近可能性が高くなる。そして、処理コストに見合う認知効果が得られたと聞き手が認識した時点で、発話解釈が終了する。¹² これをもとに、「文字通り」の後続表現の解釈プロセスを次のように定める。

(30) 後続表現の解釈プロセス

- a. 後続表現の慣習的意味を得る
- b. 「文字通り」の手続き的意味から、後続表現の非帰属的メタ表示を形成する
- c. メタ表示からコンテキストに整合する解釈を得る
- d. a と c を比較する

このプロセスで特に重要なことは、後続表現の解釈において慣習的意味とコンテキストに整合する意味の 2 つが関与する点である。本節の残りでは (30) の各ステップについて説明する。

まず、(30a) のステップで後続表現 (「文字通りの NP」であれば NP) の慣習的意味 (際立った意味) を得る。慣習的意味は遭遇頻度が高いため、入手可能性の高い情報だと考えられるからである。(30a) が他のステップに先行することは、際立った意味がコンテキストに関係なく最初に得られるとした心理学的証拠 (Giora 1998, 2003) に合致する。¹³

¹² 認知効果とは、聞き手がアクセスできる情報の総体 (認知環境) を改善することを指し、(i) 既得知識の正しさを保証するような情報 (ii) 既得知識が反証されるような情報 (iii) 既得知識との演繹により、新たな情報を導出させるような情報のいずれかの情報が得られた場合に (正の) 認知効果が生まれる。本稿では詳しい議論を避け、「文脈に整合するような新たな解釈」程度の意味で認知効果という用語を用いる。

¹³ 本稿では、際立った意味 (salient meaning) を指して慣習的意味と呼ぶ。際立った意味とは概略遭遇頻度が一番高い意味を指し、Giora (1998; 2003) は語やイディオムの意味理解に関する心理実験を行い、際立った意味がコンテキストに関わら

次に、(30b-c) のステップでメタ表示からコンテキストに合致する解釈を得る。「文字通り」の手続きの意味により、書記形といったパラ言語情報に加えて構成要素の意味へのアクセスが促されるようになる。その結果、後続表現の解釈において多様な情報が利用可能となる。

そして、(30d) のステップで慣習の意味・メタ表示から得られた意味を比較する。このとき、両者の意味がコンテキストで保持される場合、後続表現はダブルミーニングとして解釈され、そうでない場合は単一の解釈をうけることが考えられる。次節以降、(30) から後続表現の解釈を説明する。

5.2. ダブルミーニングを生む場合

3.1.4 節で述べたように、「文字通り」の後続表現はダブルミーニングとして解釈されることが多い。(30) を用いた説明を行う前に、ダブルミーニングの解釈プロセスについて概観したい。

ダブルミーニングとは文字通り 2 つの意味が生じる現象であるが、関連性理論の観点からは、なぜ 1 番目の解釈が得られた時点で処理をストップしないのかが問題となる。岡田 (2009) は関連性理論を用いて和歌における掛詞の解釈プロセスについて考察し、「和歌」という媒体が聞き手に深い理解を要請するためにダブルミーニングが得られるのだと説明した。すなわち、入手可能性が高い (処理コストの低い) 解釈を得た後、聞き手がさらなる認知効果を期待することで解釈を続行し、2 番目の解釈が得られた時点でダブルミーニングが把握されるのである。しかし、本稿で挙げた用例は新聞や web ページから採取したものであるため、これらの媒体自体が聞き手 (読み手) にダブルミーニングの理解を促進するとは考えにくい。

後続表現のダブルミーニングはメタ表示に課せられる処理コストの高さによって説明が可能である。一般に、メタ表示は発話の表示に比べて処理コストが高いことが指摘されている (東森 2015)。そうした場合、最初に得られる解釈は後続表現の (低次の) 表示によるもので、次に得られる解釈が「文字通り」の手続きの意味から形成された非帰属的メタ表示によるものだと考えることができる。本

ず他の意味よりも先にアクセスされることを実証した。だが、近年の関連性理論では特定の語義に対する特権性を認めていないことから、際立った意味と入手可能性の高さについては議論の余地がある (Giora 1998; Vega Moreno 2007)。とはいえ、メタ表示から得られる解釈 (e.g. 「葉っぱ」) は相対的に処理コストの高い情報であるため、通常の表示から得られる際立った意味の理解が前者に先行するという本節の主張は妥当だろうと思われる。

稿では、発話解釈において最初に得られる言語表現の意味を慣習的意味（際立った意味）だと仮定した。この仮定は、「文字通り」の後続表現がダブルミーニングを生む事例において、常に慣習的意味が解釈の1つとして選択される事実からも支持される。

例として、3節で挙げた「文字通りの『虎の子』」についてダブルミーニングが生じるプロセスを説明したい。

- (31) 繁殖のためにやって来たが、病気の有無を調べる検疫も無事に終了。展示室では約2メートルの近距離で、生後4カ月のかわいい盛りを観察できる。天王寺動物園は「文字通りの『虎の子』。人気者にと期待してま

(=(21))

まず、(30a)のステップで「虎の子」における慣習的意味「大事な事物」を把握する。次に(30b-c)のステップで「虎の子」について非帰属的メタ表示を形成する。このとき、(31)のコンテキストで関連性を生むのは「虎」「子」の字義の意味であるため、結果として「虎の赤ん坊」という解釈が得られる。そして、(30d)のステップで両者の解釈がコンテキスト上で整合する解釈だと聞き手（読み手）が認識した時点で「虎の子」はダブルミーニングとして理解されるのである。¹⁴

5.3. ダブルミーニングを生まない場合

(9)の「綱渡り」や(23)の「肉食系」が示すように、全てのコンテキストで後続表現がダブルミーニングとして把握されるわけではない。この事実と、発話の表示(i.e. 慣習的意味)とメタ表示から2つの解釈が得られるとした前節の仮定は整合するだろうか。次節以降、後続表現がダブルミーニングを生まない事例について(i)慣習的意味が強調されるパターン(ii)慣習的意味が破棄されるパターンに区別し、説明していく。

5.3.1. 慣習的意味が強調される場合

(13)に示した機能のうち、後続表現の慣習的意味が強調されるパターンに対応

¹⁴ Park (2016) は literally の機能の1つとしてダブルミーニングを誘発する機能を挙げているが、なぜ literally が後続表現のダブルミーニングをもたらすかは説明していない。筆者は(30)の解釈プロセスから literally の機能も説明できると考えているが、この点については別稿に譲ることにしたい。

するものとして (13c) の「後続表現の程度性を有する特徴が顕著であることを明示する機能」や (13d-e) の「比喩的意味の強調」「字義的意味の強調」が挙げられる。しかし、単一の意味が強調されることは (30) のプロセスからどのように説明されるのだろうか。

慣習的意味のみが解釈に用いられる状況は、(30) のプロセスに照らすと (30a) のステップで得た解釈と (30b-c) で得た解釈がともに同一であることに相当する。そして、(30d) のステップにおいて聞き手 (読み手) は適切な認知効果を得るため、後続表現の慣習的意味について、話者のコミットメントを強めるのか、もしくは特定の性質が顕著であると解釈すると仮定しよう。そうすることで、機能 (13d-e) は前者から説明され、機能 (13c) は後者から説明される。2.2 節でも述べたように、後続表現には「地獄」のように程度性を有する性質を表すものと、「大砲か、バターか」「適応できない人」のように程度性を持つとは断定できないものがある。「程度性」という概念については別途議論が必要となるため、どちらの推論が反映されるかについての詳細は今後の課題としたい。¹⁵

5.3.2. 慣習的意味が破棄される場合

(13) に示した機能のうち、慣習的意味が破棄されるパターンに対応するものは (13a) の「後続表現の構成要素の意味を活性化させる機能」や (13b) の「後続表現が本来の意味 (i.e. 字義的意味) であることを明示する機能」などがある。先に挙げた「綱渡り」や (23) の「肉食系」といった例では、慣習的意味の「危険な行為・状態」「恋愛に積極的な様」がコンテキスト上で破棄され、字義通りの解釈のみが与えられる。

慣習的意味が破棄されるプロセスは次のように示される。(30a) で得た最初の解釈 (慣習的意味) と (30b-c) で得た解釈が異なり、(30d) のステップで前者の解釈がコンテキストに整合しないことで破棄された結果、メタ表示から得られた後者の解釈のみが残るのである。

6. おわりに

本稿では「文字通り」という標識について発話解釈の観点から考察し、これを

¹⁵ 筆者の内省に基づき「大砲か、バターか」「適応できない人」といった例では何らかの性質の甚しさが喚起されないと判断した。そのため、本稿では「強調」する対象を (i)特定の意味に対する話し手 (書き手) のコミットメント (ii)特定の性質の甚しきの2つに区別しているが、2.2 節でも触れたように、この区別が妥当なものかどうかは議論の余地がある。

手続き的意味として示した。まず、ここまでの議論を簡潔に振り返る。1 節では「文字通り」の後続表現が多様な解釈を生む現象を紹介し、リサーチクエスチョンを提示した。2 節では先行研究として靫山 (2014) を取り上げ、提案された機能に対して 2 点の疑問が残ることを指摘した。3 節では用例観察を行い、新たに 4 つの機能を提案した。4 節ではパラ言語的情報を参照させる手続き的意味として「文字通り」の機能を規定した。5 節では関連性理論の発話解釈ストラテジーを援用しつつ後続表現の解釈プロセスを提示し、手続き的意味から (13) に示す個別の用法へ派生することを説明した。

本稿の結論として、リサーチクエスチョンに対する回答を行う。

(32) リサーチクエスチョン:

「文字通り」は、後続表現の解釈に対して何らかの役割を演ずると考えられる。その昨日は何であり、後続表現はどのように解釈されるか?

リサーチクエスチョンの答え:

「文字通り」は「パラ言語情報を参照し、後続表現の非帰属的メタ表示を形成せよ」という手続き的意味として同定される。後続表現の解釈は (i)入手可能性の高い慣習的意味 (ii)メタ表示から得られた、コンテキストに整合する意味 との比較から生じる。

参考文献

- Carston, Robyn. 2002. *Thought and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell Publishing.
- Carston, Robyn. 2016. The heterogeneity of procedural meaning. *Lingua* 175-176: 154-166.
- Giora, Rachel. 1998. When is relevance? on the role of salience in utterance Interpretation. *Revista Alicantina de Estudios Ingleses* 11: 85-94.
- Giora, Rachel. 2003. *On Our Mind: Salience, Context, and Figurative Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Israel, Michael. 2002. Literally speaking. *Journal of Pragmatics* 34(2): 423-432.
- Iten, Corrine. 2005. *Linguistic Meaning, Truth Conditions and Relevance: The Case of Concessives*. London: Palgrave Macmillan.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Park, Semi. 2016. Literally does not always mean literally: a corpus-based diachronic study on literally as an intensifier. *SNU Working Papers in English Language and Linguistics* 14: 124-142.
- Sperber, Dan and Deidre Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Cambridge: Harvard University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge University Press.
- Vega Moreno, Rosa E. 2007. *Creativity and Convention: The Pragmatics of Everyday Figurative Speech*. Amsterdam: John Benjamins.
- Wilson, Deirdre. 2000. Metarepresentation in linguistic communication. In Dan Sperber (ed.), *Metarepresentations: A multidisciplinary perspective*, 411-448. Oxford: Oxford University Press.
- 岡田聡宏. 2009. 「多義的発話について」『言語 文化 社会』7: 29-42.
- 佐藤信夫・佐々木健一・松尾大. 2006. 『レトリック辞典』東京: 大修館書店.
- 塩田英子. 2018. 「概念の文字化と語彙語用論: カイダー字と絵心経にみる共感覚的メタ表示を例に」『龍谷大學論集』492: 105-147.
- 近大志. 2020a. 「『文字通り』の手続き的意味に関する考察」京都大学 人間・環境学研究科修士論文.
- 近大志. 2020b. 「慣習的表現の非慣習的読みに関する考察 – 『文字通りの NP』を例に –」『第 22 回日本語用論学会発表論文集』: 97-104.

東森勲 (編) 2015. 『メタ表示と語用論』 東京: 開拓社.

榎山洋介. 2014. 「文字通り」の機能」『名古屋大学日本語・日本文化論集』 22: 143-157.

吉村あき子. 2018. 「第 II 部 最新の語用論研究の進展」. 早瀬尚子 (編) 『言語の認知とコミュニケーション』 68-122. 東京: 開拓社.

辞書・言語資料

jaTenTen コーパス [<https://www.sketchengine.eu/jatenten-japanese-corpus/>]

New Oxford American Dictionary

Twitter [<https://twitter.com/>]

朝日新聞データベース 聞蔵 II [<https://database.asahi.com/>]

The Procedural Meaning of *moji-dori* ('literally')

Chika Taishi

The purpose of this paper is to discuss the function of *moji-dori* ('literally') from a view of utterance interpretation. According to Momiyama (2014) and other studies, there can be several functions such as "drawing attention to the constituents of the modified elements", "interpreting them as literal meanings". There are two possible explanations for the function of *moji-dori*; one is to specify it as a polysemy, and the other is to interpret it as usages derived from a more general procedural meaning. For the purpose of this paper, the author would take the latter way and propose the procedural meaning of *moji-dori* as "forming a non-attributive metarepresentation of subsequent elements via para-linguistics information (i.e. orthographic form)", providing a relevance-theoretic account of the detailed process of interpreting the subsequent elements (Wilson and Sperber 1995, Wilson 2000).